

ラオスの こども通信

83号
2022年8月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 中等学校の図書館に新しい展開 ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす ▶ p.3
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶ p.4
- メコンのほとり「願」 ▶ p.4



*写真の説明はp4をご覧ください。

中等学校の図書館に新しい展開

ヴィエンチャン県の中等学校3校の図書館開設・運営支援・研修のプロジェクトが2022年7月に完了しました。

2019年3月にスタートして1年足らずでコロナ禍となり、ロックダウンや学校閉鎖で計画はずれこみました。でも、3校の熱意、県・郡教育局の協力、ラオス事務所スタッフの頑張りで、この3年半、学校に、地域に、先生に、生徒に、さまざまな変化が起こったのです。(日本NGO連携無償資金協力「ヴィエンチャン県における中学校の図書館整備を通じた読書推進事業」)

村のおとなたちも巻き込んで

力を入れた一つが、学校図書館の運営に村長さん、父母会長、村の女性同盟・青年同盟の代表などを巻き込むこと。村教育開発委員会(VEDC)のメンバーが関わることで、学校の先生だけでなく地域ぐるみで図書館を支えていくことを目指しました。

ヒンフープ中等学校ではVEDCが中心になってお金を集め、図書室の横に念願のトイレを設置することができました。



学校図書館オープンデー(サカ中等学校)

また、サカ中等学校では、先生が忙しい時期でも開館できるように、VEDCの呼びかけで近隣住民が研修を受けて、図書館ボランティアとなりました。

2022年1~2月、各校は「学校図書館オープンデー」を開催し、村人を招待して図書館の存在をアピールしました。

「自分たち」の学校図書館に

先生方は、施設運営の計画づくりなど、これまであまり経験したことがありませんでした。しかし、図書館運営を担う中で、「(隣に小学校があるから)来年度は小学校向けの参考書もそろえたい」など、学校、地域の状況や特色をふまえながら図書館担当の先生から図書購入計画が出されるようになりました。

さらに、図書館用品の支出簿をつけて次年度予算の参考にしたり、お昼の時間が過ぎても計画づくりに没頭している先生と村人の姿に、自分たちの大切な図書館になっていると感じました。

目を引くサイン、手に取りたくなる展示に

基本的な業務や、本に親しむ図書館基礎研修に加えて、中等学校での学びに役立つ図書館として進化するための応用研修を実施しました。「①図書館サイン・展示研修」は、図書館担当の先生とボランティアの生徒が参加。利用案内や本棚のインデックスといった図書館サインを考えたり、授業や特定のテーマで図書紹介する展示を作ったり…。自分たちの工夫次第で、図書館が魅力的に生まれ変わるという発見、気づきがありました。

図書館オープンデーでは、アイデアを活かしたサインや思わず手に取りたくなる本の展示を先生や友だち、村人にお披露目しました。「自分たちが作った展示を熱心に見てくれてとっても誇りしかった、またやりたい!」とさらに熱が入ったようです。



「このサインはココに〜」先生と生徒で図書館サイン計画を作成(ボンサイ中等学校)

本を使い、授業に工夫をこらす先生たち

もうひとつは、「②授業における図書活用研修」。学校には教材や参考書がほとんどないため、今まで先生たちは教科書だけで授業を行ってきました。図書を使って効果的な授業を進める技を身につけて作成した授業計画案では発想が開花！折り紙や昆虫の本を使って数学の「対称」を学び、歴史・地理、化学でグループに分かれ調べ学習をするなど、少ない図書を工夫して活用し、柔軟に授業をデザインしていくようになったのです。

先生たちが口々に言っていたのが、「図書を活用することで、授業がやりやすくなった」「生徒たちの理解が深まった」「授業に主体的な活動を組み込めるようになった」ということ。生徒たちの学びがより良いものになることへの願い。それが、先生が熱心に取り組む原動力になっています。

「すべての答えを持っている3番目の家」

一方、生徒の皆さんはどう感じているのか。サカ中等学校の図書館ボランティアの女子2人に聞いてみました。

Q: 図書館ができて何か変わった？

A: (ノック) たくさん本を知って前より勉強するようになったかも。(ソク) 私も国語の成績が上がったよ。あと料理の本を借りて家で作るようになった。

Q: ボランティアして、どんなときが楽しい？

A: (ノック) 友だちにおススメの本を紹介するとき。(ソク) 私は絵本の読みかせ。家に持って帰って、学校に行っていない近所の子たちに実演するときもあるの。

Q: 本を使った授業を受けたことがある？ どうだった？

A: (スク) 文学と歴史の授業では何度も。教科書だけの授業よりずっと楽しい。(ノック) 私は英語と国語。(本に出てきたことを) もっと知りたいって興味が湧くの。

最後にソクさんが素敵な言葉をくれました。

「図書館は、すべての答えを持っている。図書館は、(自宅、教室の次の) 3番目の家です」

インタビューに答えてくれたソクサワンさん(左)とノックノイさん(サカ中等学校)



SNSに交流大会、広がるネットワーク

今回の図書館のプロジェクトは、3校のうちポンサイ中等学校が先行して2019年秋に開設され(「ラオスのこども通信」76号、79号をご覧ください)、サカ、ヒンフープが続きました。これら3校はじめ同郡・県内の学校図書館どうして情報交換、切磋琢磨できるように作った各校図書館のFaceBookページやMessengerグループで先生たちの横の繋がりが生まれています。

2022年4月には活動の集大成として3校にさらに同郡の3校が加わって合同の「学校図書館交流大会」を開催。初日は学校対抗の図書館サイン・展示コンテストを実施しました。大会後に、他校の良いサイを借り入れる学校も。2日目は、各校代表の先生が「授業における図書活用」の発表。同じ教科の他校の先生が、熱心に質問やコメントをしている姿もありました。この交流会は、県内他校の参加を増やしながら今後も実施していく予定です。



図書館展示コンテスト、教科関連と自由テーマ展示で腕を競う

次の学校図書館へ、新たなステップ

「次回のプロジェクトでは、皆さんは(次回対象校の)先生の先生ですから...」。5月末に実施した事業評価会議で、当会ラオス事務所スラピー所長は3校に向けてこう締めくくりました。来年スタートするJICA事業では、同じくヴィエンチャン県のムーン郡、サナム郡で、さらに発展させた取り組みを始めます。今回の3校が先輩校として活躍することを願っています。

(渡邊淳子/ラオス事務所駐在)

※「学校図書館交流大会」の動画をコチラから視聴できます
<https://youtu.be/qpqcX0xnlEs>



いと実感することができた。そこで、生徒はもっと、広く世界を知りたい、学びたいとの思いに至り、さらなる学びの場として、職業訓練校や単科大学、大学などに進む生徒が増えたのです」

生徒たちにとっての希望の職業は、これまでは身近で活躍する警官や兵士、役人、教師などでした。これが、自動車修理やコンピューター技師、サービス業など広い分野が目に見えようになってきたというのです。

視野を広げるといえるのは、図書館が当たり前の日本では当然の機能と無自覚になっていましたが、ラオスで、この機能の意義をはっきりと実感することができました。

(野口朝夫/事務局長)



ヒンフープ中等学校の校長先生と

はじめる・つながる・つくりだす

[2022.2-2022.7]

アタプー、記憶伝える調べ 防災へつなぐ

2018年に起こったアタプー県の水害の記憶を語り継ぐため、先生・生徒が制作した詩集絵本『アタプーの詩』。3月、完成した絵本を携えて1年ぶりに、サナムサイ郡を訪問しました。

初日は絵本を制作したサナムサイ中等学校で、引渡式を開催。県・郡教育局、中等学校・小学校の先生、生徒が集まりました。会場には、2020年のワークショップで描いた絵本の挿し絵原画全作品を展示するなか、詩を執筆したスリヴォン副校長先生と生徒で詩の朗読をしたり、「ラム」と呼ばれるラオスの民謡にのせて詩を唄い演奏しました。



一緒に学校を回り、ラム演奏してくれたサナムサイ中等学校の2人

この地域は台風・豪雨による水害も多く、今後被害を繰り返さないように、午後からは「防災マップ」を作成しました。「明日この学校に台風がやってくるとしたら？」という想定で、先生・生徒たちがスマートフォン片手に校舎や校庭内を歩いて、危ないところをチェックし、地図に書きとめ必要な対策を考えました。

2日目以降は、同郡の他の小中学校3校を訪問しました。生徒のラム演奏に耳を傾けながら涙を流していた学校の先生...防災マップ作りで、「図書は(浸水に備え)棚の上に移動したい方がいい」「この廃材は(強風がきたら)危ないから片づけておかないといけない」としっかり自分の考えを発表していた生徒たち...絵本の制作・活用を通じて、その土地の人たちがラムというラオスらしい方法で記憶を語り継ぎ、災害の備えを考える機会を設けることができたことは、次に繋がっていくでしょう。

※『アタプーの詩』朗読の動画はこちら↓
<https://youtu.be/3M3vIwbVEy0>
ラム演奏の動画はこちら↓
<https://youtu.be/s4ZzN9ppd0>



校舎・校庭をまわって作った防災マップをグループごとに発表

「文字絵本」「数字絵本」初版を復刻!

25年前の初版刊行以来、ラオスの子どもたちに親しまれてきた「文字絵本」「数字絵本」。「文字絵本」は再版の度に色が変わってしまい、「数字絵本」は絶版になっていました。

2020年冬募金の皆さまからのご支援で、初版復刻プロジェクトがスタートしました。すでに原画がないことから、「初版の色の再現」が大きなチャレンジでした。スキャンは日本で、編集・印刷はラオスで行い、入念に色調整して初版にかなり近づけた「文字絵本」「数字絵本」、合計約11,000冊が完成しました。日本で和訳付きも販売しています。ラオス事務所スタッフの読み聞かせ動画も視聴できます。ぜひお求めください。色校正は初版と見比べ、細かにチェック



※「文字絵本」「数字絵本」の購入はコチラから
<https://laostoehon.thebase.in/>



新たな図書室が11か所でオープン!

学校図書室の開設はコロナ禍で延期されていましたが、徐々に実施することができました。各地の図書室では、初めて出会う本に嬉しそうなお子どたちの笑顔があふれました。

2/14-2/19 カムワン県3校(ナーバオ小学校、ブアラパー小学校、カムヘー小学校)

2/26-3/5 ファパン県4校(ナートン小学校、カーンロン小学校、ファイヒアン小学校、パーコムノイ小学校)

3/31-4/1 ヴィエンチャン都1校(国立芸術学校)

4/25-4/30 チャムパサック県3校(ラック28小学校、バンリアン小学校、バクソン中等学校)

これらの図書室は、次の皆様からご支援いただきました。ありがとうございます。

福岡那の香ライオンズクラブ、2021年クラウドファンディング、ChildFund、OSHIHARA、すかいらーくグループ

ピーマイ・パーティを開催しました

4月24日(日)、大田区池上会館で「ピーマイ・パーティ2022」を開催、今回で39回目を迎えました。新型コロナウイルス対策として人数を限定し、着席形式で実施しました。

60人に参加いただき、22人のボランティアが運営をサポートしてくれました。毎年好評の手作りのラオス料理はランチボックス形式に。ラオス風そうめんやココナッツミルクと緑豆のデザートも付いて大好評でした。食事の後は、「ラオスのこども」の活動40年を振り返り、たくさんの参加者の方々に、ラオスのこどもの活動との関わりを語っていただきました。ありがとうございます。



「ラオスのこども」の仲間たち

ラオスが世界を広げてくれた

岡田龍之介さん(元インターン)

周りが読めない文字を読めるのって面白そう。

そんな理由から大学ではラオス語を専攻に選びました。最初はラオスについてほとんど何も知りませんでした。が、ラオスの歴史を一から学び、毎日ひたすら文字を書きながら発音の練習をして、という日々を送るうちにラオスが好きになっていきました。



私が最初にラオスを訪ねたのは2019年の2月。ラオス国立大学で2週間のラオス語集中研修に参加したときでした。初めて見るヴィエンチャンの景色は新鮮で、刺激的でした。パトゥーサイ(凱旋門)は写真で見るとより大きくて、特に夜はライトアップされて綺麗でした。ナイトマーケットではビアラオのロゴTシャツを買い、今日も着ています。メコン河の夕日も絶景でした。時間がゆっくり流れるとはこういうことかあ、と思いながらビアラオを飲んだのをよく覚えています。

そんな楽しいラオス研修でしたが、大学では開発課題について学び、ラオスが苦勞していることも知りました。特に教育分野においては植民地時代の影響もあり、課題を多く抱えていました。私自身、教育はその人の可能性を広げるといってとても重要なものだと考えていて、ラオスの教育、特に初等教育に関心を持ちました。2020年9月からは国立大学に1年間留学し、現状をこの目で見たいと思っていました。しかしコロナ禍で留学は中止となって沈んでいた時に、大学の授業で教材として使っていた「ラオスのこども」のラオス語の絵本が目に入りました。日本にも事務所があると言っていたな、とホームページを見て、インターンの募集を知りました。それから1年間もお世話になり、オンラインミーティングや出前授業、書き損じハガキプロジェクトなど多くのことを経験させてもらいました。その中で、日本でもたくさんの方がラオスを心から支援していることを知りました。

ラオスに出会って、世界が広がりました。ラオス人の友人もたくさんでき、会の活動やその他国際協力関連でもたくさんの方にお会いできました。これからは私がラオスに恩返しをする番です。

表紙の写真

「学校図書館交流大会」のひとコマ。プロジェクト対象校が集まりコンテストや発表をするため、どの学校の先生も熱心に念入りに準備して大会に臨んでいました。

サカ中等学校のグラヴォン先生(写真)は、図書館担当で自然科学の先生。中1「地球と地殻・地盤」の単元で、図書館の図鑑や地球儀などを活用した授業案を発表してくれました。

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 83号

2022年8月発行 代表: チャンタソン・インタヴォン 編集人: 森透

発行: Action with Lao Children / Deknoylao

(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

〒143-0025東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303

TEL/FAX 03-3755-1603 e-mail: alctk@deknoylao.net

<http://deknoylao.net>

都営地下鉄浅草線西馬込南口下車徒歩7分

郵便振替00140-6-462494



クラウドファンディング

みなさまのご協力に感謝いたします

2月17日から3月30日にかけて、【「もっと本を読みたい！」ラオスの子どもたちに、やべみつのりさんの絵本と紙芝居を】クラウドファンディングを実施しました。残念ながら目標額を達成することはできませんでしたが、49人の方から合計415,000円ものご支援をいただくことができました。本当にありがとうございます。ご寄付いただいた方はもちろん、日本各地から応援の声も多く寄せられており、心から感謝申し上げます。

不足する資金をさらに集めて、計画していた環境絵本『ぼくはどこへいくの』と紙芝居『これはジャックのたてたいえ』の出版準備を進めています。秋頃には『ぼくはどこへいくの』の印刷が完了します。

メコンのほitori願

ご寄付・支援のお願い

「ラオスのこども」は40周年を迎えましたが、長引くコロナの影響もあり財政的に厳しい状況が続いています。事務所移転や併設図書室の閉鎖も検討しました。ですが、地域の子どもの居場所、学びの場として、そして先生たちの読書推進活動のトレーニングの場として貴重な図書室をできる限り存続させることを理事会で決定しました。

これまででも皆さまから経済的にもご支援をいただいていたこと、大変ありがたい感謝しておりますが、また、日本でも物価が高騰する中でのお願いは心苦しいのですが、今後とも事務所を移転せず併設図書室活動も継続できるよう、さらなる支援をお願いさせていただきます。金額は自由にお決めください。

心からよろしくごお願い申し上げます。

代表チャンタソン インタヴォン



ラオス事務所の図書室の様子。子どもたちが学校の昼休みに、放課後にやってきて、読書やおしゃべり、ワークショップを楽しむ、居心地のいい場所になっています(いずれもコロナ禍前です)